

和音

京都大原記念病院グループ

KYOTO OHARA HUMAN CARE NETWORK

No.255

「和音」編集室

京都大原記念病院グループ

〒601-1246

京都市左京区大原井出町

164番地

TEL (075) 744-3160

FAX (075) 744-3161

Mail kyotoohara-hp@kyotoohara.gr.jp

<https://www.kyotoohara.or.jp>

2020年

12月

DECEMBER

2021年の京都大原記念病院グループ

1981(昭和56)年、京都大原地域で初の医療機関「大原記念病院(当時)」として歩み始めた京都大原記念病院グループは2021(令和3)年7月に創立40周年を迎えます。和音誌では8月号で、その歩みの一端をご紹介いたしました。「時代がどのように変化し、人は安心のために何を求めるのか」ということに向き合い続けた歩みを礎に、立ち止ることなく前進してまいります。節目の年を迎えるにあたり、医療・介護の専門性だけでなく、グループとして培う文化や価値観、関係の皆さまからの支えを再認識し、それを可視化する試みを少しずつ始めています。

積み重ねた「文化」目に見える形に

節目の40周年 新たな展開へ

京都大原記念病院グループには医療・介護専門職や事務職など約1300名(2020年4月現在)の職員が在籍し、それぞれの立場で職務にあたっています。共通して掲げるシンボルが現在のロゴマークです。このマークは2001(平成13)年に制定しました。以来、2006年にグループ名称の変更に伴う改正を施したこと以外は、変わりなく掲げ続けています。このマークは「ヒトがヒトを優しく包み込むつながり」をイメージし作られました。私たちは創業以来、時代がどのように変化し、人は安心のために何

「ヒトがヒトを優しく包み込むつながり」をイメージしたロゴマーク



京都大原記念病院グループ

KYOTO OHARA HUMAN CARE NETWORK

を求めるのかということに向き合い続けています。高付加価値サービスの原



三千院参道にて

南天

真っ赤な実は正月用

大原の四季

中国や日本が原産の常緑低木で、自然界では高さ1~3mにまで生長します。漢名の「南天燭」から日本では「ナンテン」と呼ばれています。夏に咲いた白い花は徐々に赤色になり、実はお正月の飾りにも利用されています。今!大原では真っ赤な実が皆様をお待ちしています。(渉外 榎並宏之)

発祥の地「山荘」 古建築の粹をシンボル化

心に寄り添う姿勢 職員一人一人が再認識

◎

点は患者様、ご利用者の心に寄り添い不安を取り除くこと。これからも人の心に寄り添い、人のニーズに応え続けるグループでありたい。そのような願いを込めています。

しかしながらこうした意味付けは、時が経つにつれて「当たり前」のものとして意識が向かなくなってしまいます。グループは未来に向けて、一人でも多くの方が安心してその人らしい人生を送ることのできるサポートをするために、力強く歩み続けなければなりません。これまでの歩みを礎にしつつ柔軟に進んでいくためには、「当たり前」になっていく一つ一つの価値を職員一人一人が再認識するとともに、社会にしっかりと伝えていくことが大切であると考えています。

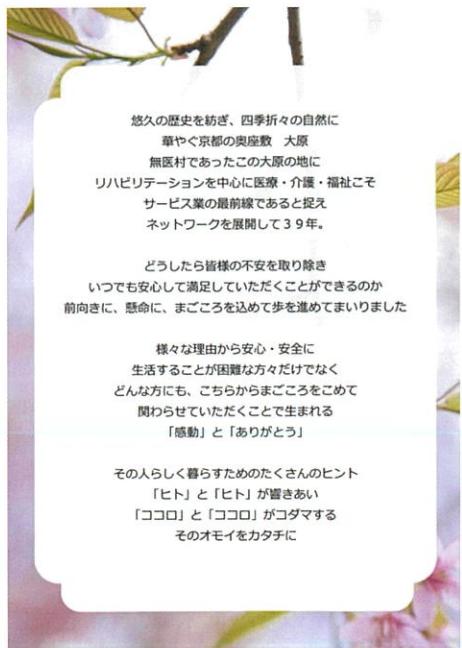
動指針だけでなく、グループがどのような変遷をたどって現在の形に至り、そこにどのような意味があったのかをまとめています。職員一人ひとりに向けて発行する手帳にも掲載し、多くのスタッフが携帯しています。

この冊子にはグループの始まりの地でもある「京都大原児玉山荘（通常非公開）」に着想した物語を込めました。この物語をコンセプトとして、今後、さまざまな発信を試みます。山荘の窓枠や母屋の欄間などは、オリジナルのエレメントとして活用しています。そこには「グループ職員一人ひとりが、患者様、ご利用者の人生に明るい光さす窓のような存在になる」との願いを込め、各デザインには窓の外に見える青空なども基調としています。ウェブサイトや、シャトルバスラッピング、挨拶状（年賀状、お札状など）、ステーショナリー（手提げ紙



グループ発祥の地「山荘」の欄間などの文様をアレンジしたオリジナルの事務用品など

袋、クリアファイル）、名札など少しずつ目に見える機会を広げています。今後も名刺やパンフレットなどへと範囲を広げていく予定です。こうした発信が、私たちが大切にしてきた価値観を伝えるきっかけとなることを目指していきたいと思います。また、私たち自身もそこに思いを寄せる機会としていきます。今後も皆様に安心を提供できるよう一層努めてまいります。



グループの変遷とその意味を記したコンセプトブック

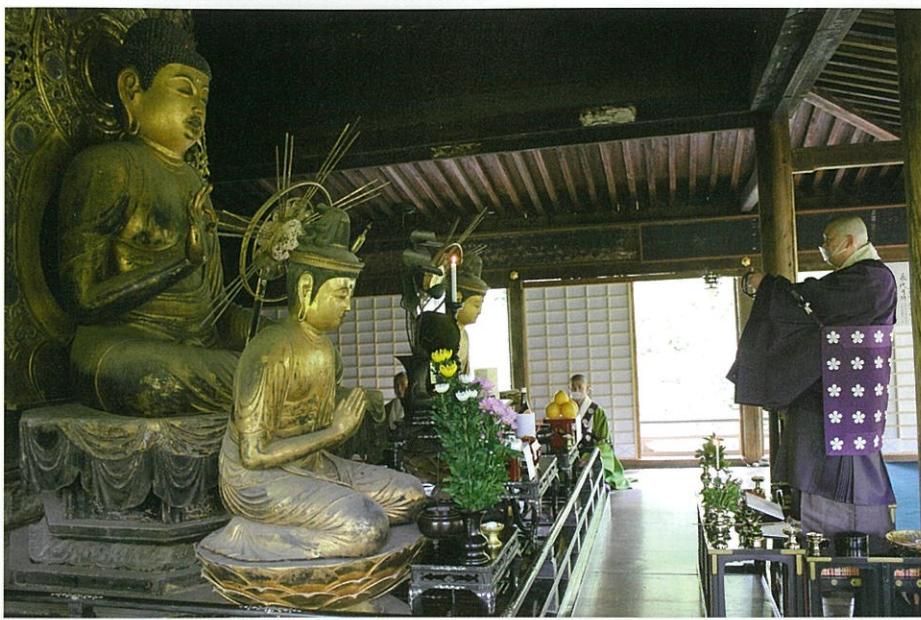
その第一歩として今夏「コンセプトブック」という冊子を職員向けに発行しました。ここには、グループの理念や行

「和音」終刊 広報誌も刷新 誌面を倍増 年4回発行へ

上記取り組みの一環として、本誌「和音」も今号をもって終刊とし、2021年1月から新たな姿へ生まれ変わります。1995年4月に創刊した本誌は、今号で通巻255号を迎えました。これまで取材や寄稿など様々な形で多大なご支援をいただいたことについて、心よりお礼申し上げます。

新しい広報誌は、お役立ていただける情報発信を目指すことはもちろん、現場の表情（当グループの様々な取り組み）を通じて私たちが「理念」や「行動指針」として掲げ、大切にしている想

いが伝わるような誌面づくりを目指します。リニューアル後は全8ページの冊子、年4回発行へ取り扱いを変更します。ウェブサイトと連動した発信を予定しており、グループのサービスをご利用中の、本誌を定期郵送している方へは、今後はダイジェスト版をお届けする予定です。気になるトピックスがあればぜひウェブサイトも併せてご覧ください。新たに冊子郵送をご希望の方は、ご遠慮なくお申し付けください。今後ともどうぞよろしくお願ひ申し上げます。



法事が行われた往生極楽院

三千院で「陵風のつどい」



法要に使用される五色の散華



やすらぎの碑前で行われた2018年の法要

密集を避けて 僧のみで法要

京都大原記念病院グループの施設で亡くなった方々を慰靈する「陵風の集い」の法事を10月28日に、大原・三千院で行いました。例年は11月4日にグループ施設の一つ「ケアハウスやまびこ」内にある「やすらぎの碑」前に主な職員が集い献花など行いますが、今年はコロナ禍による密を避けるべく、5人の僧のみで執り行いました。

法要の式場は三千院の往生極楽院。平安時代末の12世紀に造られた阿弥陀

三尊（阿弥陀如来、觀世音菩薩=向かって右、勢至菩薩=同左）が安置されています。導師は三尊に向かい合い、式衆と呼ばれる補助役の僧4人が左右に座します。導師は穴穂行仁・三千院執事長が勤めました。

香木を焚き始めた柄香炉を捧げ持った導師が立ち座りを繰り返す三來（さんらい）で堂内に香りが満ちて式が始まります。

続いて「常行三昧」の読経を行います。これは「阿弥陀様の極楽浄土に参らせさせていただきます。どうか無事にたどり着けますように」との祈りが込められているということでした。

やがて5人の僧が立ち上がり、読経の

区切りごとに散華と呼ばれる紙片を撒きます。直径約7cmで円形に近く、白、赤、黄、緑、紫の五色で、昔は仏事の際に蓮の花を撒いた風習が、時代とともに花を象徴する紙片になったということでした。

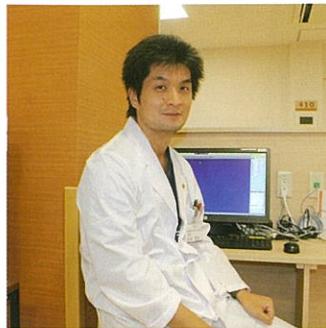
「和音」誌では式衆の一人、三千院法務部の八木覚林師に、法要の流れについて解説いただきました。団体や企業が関係する物故者の慰靈法要を行う例は珍しく、八木師は「貴重な『陵風のつどい』のお参りを通じて地元の皆様とご縁を深めることができ、ありがとうございます」と仰っていました。京都大原記念病院グループはコロナ禍収束を見込み、来年は「やすらぎの碑」前での式を復活させる所存です。

はじめまして。

私は回復期病棟での診療に非常に興味を持ち、現在も回復期病棟で先生方をはじめ、多くのスタッフ、患者様から日々学ばせていただいております。

回復期病棟は急性期病院で全身状態が落ち込んでいる患者様にリハビリテーション治療を行い、自宅・社会に復帰するための場所です。しかしながら併存疾患が多い、または重症で介助が多い患者様も多数回復期病棟に転院されてきます。その中で認知機能が低下している患者様も多数おられます。

認知とは、広辞苑によると「事象について知ること、ないし知識を持つこと」とされています。少しわかりにくいので厚生労働省の健康情報サイトで調べてみると「理解、判断、論理などの知的機能のこと」とされています。



認知について

京都近衛リハビリテーション病院
久保 元則 医師

す。精神医学的な観点では知能、心理学的な観点からは知覚・判断・推論・記

憶・言語理解があります。認知機能低下は、脳の細胞が変性したり脳虚血が生じた後に起こることが多いです。

その他の原因として、脳腫瘍、慢性硬膜下血腫、正常圧水頭症、甲状腺機能低下症、ビタミン欠乏症が挙げられます。これらによる認知機能の低下については治療可能なものもあるため早期に発見し治療を行うことが重要とされています。具体的には頭部画像の確認、転倒歴の有無、排尿障害の評価、食事摂取量、血液検査などの初期評価である程度評価することができます。治療可能な認知機能低下の原因を早期診断し適切な治療を行えば、その後のリハビリテーション治療が有効になり活動量が増えてくると考えます。

今後も患者様が自宅復帰できるよう適切な治療を行い、元気な高齢者が増ええることを願っております。

症例報告会をWeb開催

リハビリの経緯、第二日赤と

京都第二赤十字病院(第二日赤)と京都大原記念病院グループの症例報告会が10月28日、第二日赤とグループ3会場をウェブで結んで開催された。両院合わせて約120人の参加があった。

会は、発症後の急性期の治療に当たる第二日赤と、その後のリハビリテーションを担う同グループ(京都大原記念病院、京都近衛リハビリテーション病院、御所南リハビリテーションクリニック)が、連携して診た患者様の経過について理解を深める狙いで毎年開いている。今年は密集による新型コロナウイルス感染のリスクを避けるためリモート形式での開催となった。

永金義成・第二日赤脳神経内科部長が司会を務め、垣田清人・京都大原記念病院院長が開会あいさつを行った。

一例目は「回復期病棟で精神症状が悪化した頭部外傷後高次脳機能障害の事例」と題して京都大原記念病院の大曾根卓磨医師らが発表。失語症、注意障害、記憶障害を呈した50代女性が、回復期リハビリテーション病棟における多職種協働のアプローチにより一旦改善を認めたが、環境変化等の因子により精神症状の増悪を認め、社会復帰が困難になった事例を、詳細な経過と要因について報告した。



第二日赤会場とウェブでつなぎで論議する京都近衛リハビリテーション病院の職員

二例目は「早期の高次脳機能障害の改善により独歩で自宅退院に至った症例～コロナ禍で見えた課題」と題し、京都近衛リハビリテーション病院の藤井良憲医師らが発表。60代後半の男性患者は歩行や基本動作が改善し自宅に退院できたものの、コロナ禍にて入院期間に外泊ができず、自宅でのセルフケアの確認など退院後の在宅生活が十分イメージでき

ないといった課題が表出した事例となった。

閉会あいさつでは村上陳訓・第二日赤脳神経外科部長が「来年は(コロナ禍収束により)第二日赤の会場でお待ちします」と語った。

無事故無違反 92%

セーフティーラリー、高い達成率

本年も7月1日から9月30日の3ヶ月間実施された「第38回交通マナーを高める事故防止コンクール(セーフティーラリー京都)」では京都大原記念病院グループからは52チーム260人が参加していましたが、うち48チームが無事故無違反を果たし、達成率は92.3%となりました。

1チーム5人編成で、昨年は参加49チームのうち46チームが無事故無違反を果たし達成率93.9%とかつてない好成績を収めました。今年はやや下回るものも連続して高い達成率を実現できました。コンクールは終わりましたが、今後とも職員一同安全運転に努めてまいります。

京都大原記念病院グループウェブサイト
公式Facebookのご案内

グループの取り組みなど日々、更新中!
自然災害等により何らかの影響が生じた場合は
こちらで情報発信します。ぜひこちらもご覧ください!



ウェブサイト



Facebook